

共感の発達に関する研究の概観と展望：正の共感を含めた理論の必要性

著者	植田 瑞穂, 桂田 恵美子
雑誌名	人文論究
巻	69
号	1
ページ	71-90
発行年	2019-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027899

共感の発達に関する研究の概観と展望

——正の共感を含めた理論の必要性——

植田 瑞穂・桂田恵美子

1. はじめに

近年、ヒトを含めた動物の共感に関する研究が盛んに行われている。しかし、その多くは他者のネガティブ感情に対する共感を対象としており、ポジティブな感情に対する共感の様相の解明や両者を含めた理論の検討は少ない。

本論文では特に発達研究の観点から、共感に関するこれまでの理論や研究を概観し、ポジティブ感情に対する共感を含めた新たな発達モデルの可能性について議論する。

2. 共感の歴史と定義

共感には、認知的側面と情動的側面¹⁾が存在するといわれる。もともと、共感 (empathy) という用語は、Titchner (1909) がドイツ美学で使われていた感情移入 (einfühlung) という言葉の訳語として作ったことで生まれたものである。それまでの研究では、他者の経験に対する受け身で自動的な情動反応として同情 (sympathy) という言葉が主に使われていたが、心理学的な文脈におけるこの共感という用語の出現によって、相手を理解したり相手の立場に立ったりするような積極的な働きである認知的側面が強調されるようになった。一方で、共感を情動的な概念として捉え直そうといった立場もあり、その定義は長らく混乱していたといえる (Davis, 1994/1999)。そのような中で、

両者の統合の必要性が主張された (e.g. Feshbach, 1978 ; Davis, 1994/1999) 結果, 近年においては共感には両方の側面が存在するとして概ね合意されている。それでもなお, 共感の定義や構造については一義的に記述することが難しく, 研究者の関心によって境界が曖昧なものとなっており (長谷川, 2015), 各研究領域によって取り上げられる理論やモデルも様々である。

3. 主な共感理論およびモデル

現在の心理学分野における共感研究では, 主に下記三つの理論およびモデルが重視されている。ここでは, それぞれの提唱者が主張する共感の定義を示した上で, 各理論やモデルにおける共感の構造やメカニズムを概観する。

(1) Hoffman の理論

発達心理学者の Hoffman (1987) は共感を, 自分の置かれた状況よりも他者の置かれた状況により適した情動的反応とし, 主に共感の情動的な側面に焦点を当てている一方で, その喚起や発達には認知的な要素が重要な働きをする と論じている (Hoffman, 2000/2001)。

このような情動的な共感 は人生の早期から確認される現象であり, 例えば Sagi & Hoffman (1976) は, 生後 1 日の新生児のうち他の乳児の泣き声を聞いた群が, コンピュータで合成された泣き声を聞いた群や音を聞かない群に比べて, 自らも泣き出すことが多いことを示している。Hoffman (1984) は, このような新生児の泣きは生得的で自動的なものだとし, このことから共感的苦痛の喚起様式の一つとして「初期的な循環反応」が挙げられるとしている。共感的苦痛の喚起様式には, この他に以下の 5 点が挙げられる。①マネ: 相手の表情を無意識的に模倣し, その運動感覚的手がかりから情動が生じる。②古典的条件づけ: 過去に同じ情動を他者と同時に感じた経験から, 相手の情動的手がかりが条件刺激となって自身の情動が生じる。③直接的連合: 相手の情動的手がかりから直接自分の経験を想起する。④言語媒介的連合: 言語を媒介

して表出された情動を意味的に処理し、自分の経験と結びつける。⑤視点取得（役割取得とも言われる）：自分を他人の立場に置いて、感じ方を想像する。

このうち、初期的な循環反応、マネ、古典的条件づけ、直接的連合は非常に原初的な反応である、または認知的に浅い処理を必要とする一方、言語による媒介的連合や視点取得は認知的に高度な処理を必要とする。ただし、これら6つの様式は発達に伴い段階的に取って代わるものではなく、発達の中の異なる時点で獲得され、その後人生を通して作動し続ける。例えば初期的な循環反応については、泣きをコントロールできるようになることで乳児期以降は見られなくなるものの、大人においても生得的で自動的な情動反応自体は維持し続けると言われる。

Hoffman (2000/2001) はまた、このような様々な様式によって喚起された共感的苦痛と関わりを持つ社会認知的な能力として自他の区別 (**self-other distinction**) を挙げている。彼によると大人の共感的苦痛は、共感的に反応している自分自身についてのメタ認知的な意識を含んだものであり、我々はこの情動が他者の出来事への反応であることを認識した上で反応している。生後まもなく示された自動的な泣きという反応は、自他の区別の発達に従って変化し、その過程で共感的苦痛は哀れみを含んだ同情的苦痛 (**sympathetic empathy**) を含むようになり、他者を助けるためのより効果的な向社会的行動が可能となる。

このように Hoffman の理論では、情動的な共感を扱いながらも認知の役割を重要視している。Hoffman (2000/2001) は、人間は認知的に発達することで、他者の立場に立った自分自身をイメージすることができるようになり、最終的に目の前にいる人以外にも共感できるようになるという、傍観者モデルの拡張が生じるとしている。

(2) Davis のモデル

社会心理学者である Davis (1983) は、従来の共感研究において別々に扱われてきた認知的側面と情動的側面に含まれる各構成要素について、対人反応

性指標（Interpersonal Reactivity Index：IRI）を作成しその関連や資質的傾向を調べることによって、共感を多次的に捉える試みを行った。その結果、共感の構成概念として、自発的に他者の心理的立場を取ろうとする傾向である視点取得（perspective taking）、同情や憐みの情動を経験する傾向である共感的配慮（empathic concern）、他者の苦痛に対する自分の苦痛や不快を経験する傾向である個人的苦痛（personal distress）、自分を架空の状況の中に移しこむ傾向である想像性（fantasy）といった構成概念が明らかになった。このうち、視点取得は共感の認知的側面に焦点を当てた従来の尺度と、その他は情動的側面に焦点を当てた尺度と正に関連したほか、視点取得や共感的関心は他者指向的な性格特性と、個人的苦痛は自己指向的な性格特性と正に関連することが示された。

Davis（1994/1999）はさらに、Hoffmanをはじめとした様々な共感理論や研究を基に、独自の要素も付け加えて共感喚起の組織的モデルを提唱している。彼は、共感を「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念（p.15）」と広く定義し、これまでの問題点として視点取得のような「過程」としての共感と、情動的・非情動的な「結果」としての共感を区別せずに考えてきたことを挙げている。Davis はこれまで「共感」として大雑把な定義の基で扱われてきた概念を整理し、研究の中で見落とされてきた論点を明確にする目的で、この組織的モデルを示している。このモデルでは、共感が喚起される状況において典型的なエピソードを想定し、相互に関連する以下の四つの構成概念を設定しており、隣接する、またはより近い位置の構成概念の間でより強い結びつきがあるとしている。

一つ目は、見る側・相手・状況の特質である「先行条件」であり、個人差や学習歴、状況の強さや見る側と相手の類似性・関係性が含まれる。二つ目は、共感的な結果が生み出されるメカニズムである「過程」であり、Hoffman（1984）の初期的な循環反応や運動的マネは非認知的な過程、古典的条件づけや直接的連合は単純な認知的過程、言語媒介的な連合や視点取得は高度の認知的過程として分類される。三つ目は、見る側の中に生じる認知的・情動的反応

である「個人内的結果」であり、一般的に共感の情動的側面とされる反応はここに位置づけられる。情動的反応には、相手と見る側の情動がマッチした並行的なもの、苦痛を感じる相手に対する憐れみなど、相手と必ずしも一致しない反応である応答的なものに分けられる。後者には、共感的な配慮や個人的苦痛のほか、理不尽な扱いを受けた相手を見る際に感じる共感的怒りなどが含まれる。さらには、情動的な結果だけでなく、他者についての評定の正確さや、相手の行動に関する帰属的な判断など、非情動的なものもこの個人内的結果に含まれる。そして四つ目は、相手に向けられる行動的反応である「对人的結果」であり、援助や攻撃、その他の社会的行動が位置づけられる。

Davis (1994/1999) は、このモデルの枠組みの中でこれまでの研究を整理することによって、共感喚起の「過程」についての体系的な研究がほとんどないことや、より遠い構成概念への影響を考える上で間に存在する構成概念の媒介的影響を考慮すること、認知・情動が相互に影響しあうことなどを主張し、共感の多次元性を強調している。

(3) de Waal のモデル

動物行動学者である de Waal (2008) は共感を、(a) 他者の情動状態から影響されたり他者の情動状態を共有したりする能力、(b) 他者の状態の理由を推測する能力、(c) 他者の視点を取り入れ、他者に自分を重ね合わせる能力であるとし、ヒトを含めた様々な動物における共感関連現象を統合することで共感の進化を論じている。彼の提案するロシア人形モデル (Russian doll model) によると、様々な動物に共通する基盤として情動伝染があり、それは観察者において観察対象と類似した神経反応が自動的かつ無意識的に生じるという知覚-行為メカニズム (Perception-action mechanism; PAM) に支えられる。この情動伝染に加え、系統発生の過程で同情的配慮あるいは慰めといった外層が加わり、最終的に視点取得に基づく対象に合わせた援助が獲得されるといったような多層的な入れ子構造が想定されている。また、彼は Hoffman (2000/2001) と同様に、他者指向的に共感するためには、共感的情動が

自己ではなく他者に起因するものであることを認知できる必要があると述べ、「自他の区別が高度な共感の条件である」という個体発生学的な理論は、系統発生学的にも当てはまるとしている。そして、サルと類人猿の比較において、類人猿のみが鏡面の自己像の認知および慰め・援助を表出することを挙げ、進化の過程において自他の区別が進むほどロシア人形モデルにおける外側の層を獲得するとしている。慰めや視点取得などのより高度な共感は、PAM から生じる情動的反応によって支えられ、向社会的な行動へと動機づけられる。

4. 人間の共感の発達

ここまで概観した通り、これらの共感に関する理論やモデルは、それぞれ異なる学術的視点から、認知的能力や情動的反応・行動的側面を含め共感を捉えている。Davis は Hoffman などの理論を基に、人間の共感が喚起される現象について典型的なエピソードを想定することで、共感の構造や、反応の違いを左右する要因を細かく整理している。それに対して Hoffman や de Waal は、それぞれ発達や進化といった観点から共感を捉えている。彼らが高度な共感が出現する条件として挙げる自他の区別は、de Waal (2008) が主張するように個体発生学的にも系統発生学的にも重要な認知的要素であると考えられる。ここでは、そのうち個体発生学的な自他区別の働きを詳しく述べるとともに、人間の発達過程における共感の変化をまとめる。

Hoffman (2000/2001) によると、子どもは1歳ごろまで自他が未分化な状態であり、自分の共感的苦痛がどこから来るのかははっきりしない状況である。1歳前においては、眉をひそめたり口をしぼめたりするなど、自動的な情動伝染とは異なる共感的苦痛を示すようになるが、それはあくまで他者の苦痛に対して自身の苦痛と同じように反応するという自己中心的なものである。1歳のはじめにおいては、それぞれ独立の身体的存在として自他を意識しはじめ、自分の行動が相手を助けることを理解し始める。しかし、自他がそれぞれの内的状態を持っていることは理解していないため、自分の快となるものを共感の対

象に与えるような疑似自己中心的な行動を見せる。そして2歳前になって漸く、他者を自己とは独立した内的状態として捉えることができるようになりはじめ、色々な状況での他者の情動や要求により正確に共感できるようになる。この段階で、共感的苦痛は同情的苦痛を含むようになり、より効果的な向社会的行動が可能となる。さらに、5～8歳頃になると、それぞれが個人的な歴史やアイデンティティを持ち生活している存在として自他を意識できるようになり、その場の直接的な状況だけでなく、他者の長期にわたる生活条件などについても共感できるようになる。

自他意識の獲得と共感の発達が関連するというこの仮説は、鏡を使った自己認知課題における反応と、他者が苦痛を示すような状況における共感的な反応の相関を調べることによって実証されている。Bischof-Köhler (1991) は16ヶ月～24ヶ月児に対し、鏡の自己像を見せる合間に子どもの顔に汚れを付着させ子ども自身の自己鏡映像への反応を観察するというルージュテスト (rouge test) の成績と、実験者が遊んでいたテディベアを壊してしまい泣く様子を見せた際の子どもの共感的な行動との関連を検討している。その結果、テディベアを直そうとしたり配慮が含まれるような表情を見せた子どもは自己鏡映像を見て自分の名前を言ったり自分の顔の汚れに気づいたりし、自己像を認知できなかった子どもは共感的な行動を見せなかった。Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman (1992) は、ルージュテストを含む難易度の異なる5種類の自己認知課題を1歳～2歳時において縦断的に実施し、母親の報告する子どもの共感的な反応との相関を検討した。その結果、2歳時においてのみではあるが、より難しい自己認知課題に通過できる子どもほど、向社会的行動や共感的な配慮などの反応を取りやすいことが示された。さらに松沢 (1996) は1歳児と2歳児に対して、母親がバッジのピンで指を刺して痛がる様子を見せる共感課題に加え、難易度の異なる3種類の自己認知課題を実施した。その結果、1歳児において、自己認知の発達段階が高い子どもは共感課題において向社会的な行動を取ること、特に、絵カードを相手の向きに合わせて見せるかどうかという絵カード課題の成績が向社会的行動と関連することが

示された。

また、Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman (1992) の研究では、実験室において母親のネガティブ情動を示す演技に対する子どもの反応を縦断的に観察しており、その後この手法を参考にして幼少期の共感の発達の変化に関する実証的な検討が多数行われている (e.g. Knafo, Zahn-Waxler, van Hulle, Robinson, & Rhee, 2008; Roth-Hanania Davidov, & Zahn-Waxler, 2011; Zahn-Waxler, Robinson, & Emde, 1992)。その結果、「過程」としての視点取得的な姿勢に相当する、認知的に苦痛を理解しようとする言動である仮説検証 (hypothesis-testing) や、同情的な表情や言葉かけなどの共感的配慮といった他者指向的な反応は、ほとんど全ての研究において1歳時から2歳時にかけて増加することがわかっている。

また、自己指向的な情動的共感である子ども自身の個人的な苦痛に関しては、母親による日常生活の反応の報告において、この時期に減少することが示されている (Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982)。これは Hoffman (2000/2001) による、自他分離や泣きのコントロールが発達することで、自動的な泣きという反応が示されにくくなるという仮説を裏付ける結果である。しかしその一方で、実験室における行動の観察においては、この反応が1歳から2歳にかけて年齢を通して比較的少なく、発達に伴った変化は見られないという結果が示されている (Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman, 1992; Zahn-Waxler, Robinson, & Emde, 1992)。前述のとおり Hoffman (2000/2001) は、1歳の初め頃において自己中心的な共感的苦痛は疑似自己中心的な共感的苦痛に変化し、相手を助ける行動を取り始めることことから、少なくとも実験室での観察において用いられているような状況では、1歳以降の子どもは既に個人的な苦痛を示しにくいことも考えられる。このように、発達に伴う子どもの個人的苦痛の減少が見られる時期については、未だに議論の余地がある点であるといえる。

母親や実験者の演技に対する子どもの共感的な行動の観察といった共感の測定法が確立されたことにより、母親の養育態度や信念 (Kiang, Moreno, &

Robinson, 2004), 母親の情動的有用性 (Moreno, Klute, & Robinson, 2008), 母親の共感 (Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1990) など, 共感の個人差の要因となるような養育環境が明らかになっている。また, 後の問題行動との関連 (Hastings, Zahn-Waxler, Robinson, Usher, & Bridges, 2000; Rhee et al., 2013) など, 社会的な発達における共感の機能も示されてきている。ただし, これらのほとんどの研究では, 共感場面は同じような他者の苦痛状況, 特に他者が苦痛を明確に示すような状況にほぼ限定されており, 状況的な検討はあまり進んでいない。前述のとおり Hoffman (2000/2001) は, 子どもは自他分離の発達とともに 1 歳から 2 歳にかけて様々な状況での他者の感情や要求に正確に共感できるようになると述べている。また, Davis (1994/1999) は他人についての反応の全ては特定の状況的な文脈に根差すと述べ, 先行条件としての状況の重要性を述べている。このことから, 共感の発達研究において状況的要因を考慮に入れた検討が今後の課題であるといえる。

5. 正の共感

以上に挙げた共感に関する理論やモデル, それぞれの研究は, ほとんどが他者のネガティブ感情に対する共感を前提としている。一方でアダム・スミスは著書「幸福感情論」における同情 (sympathy) に関する章の中で, 人間の本性の中にはいくつかの原理があり, それは人が他者の幸運や不運に関心を抱くようにさせ, 他者の幸福を目にすることがその人にとってなくてはならないようにさせるとして, 他者のポジティブ感情に対する共感的な現象の存在を示唆している (Smith, 1759/2009)。Hoffman (1987), Davis (1994/1999), de Waal (2008) のそれぞれの定義において, 情動の種類を限定していないことからわかるように, 本来は様々な感情に対する反応が共感には含まれるはずである。

渡辺 (2015) は, 共感を他者の情動表出によって生ずる自分の情動反応として捉え, ①他者の不快が自分の不快になる「負の共感」, ②他者の幸福を見

て自分も幸福を感じる「正の共感」、③他者の幸福を見てむしろ不快を感じる「逆共感」、④他者の不幸を自分の快とする「シャーデンフロイデ」が存在するとしており、他者と自己の状態の方向が一致している負の共感と正の共感が狭義の共感であるとしている。また、快を引き起こすアンフェタミンをマウスに2匹同時に投与すると、単独で投与された時よりも、薬を投与する場所に長く滞在するようになる（Watanabe, 2011）ことから、快を感じることの社会的促進効果を指摘している。そしてこれが、ヒトの社会における仲間の絆を強化するような機能を持つ正の共感の進化的起源であると主張している。

ハッピーエンドの物語に感動するように、正の共感が日常的な現象として生じ得ることは容易に想定できるにもかかわらず、負の共感に比べてこの概念に関する研究はこれまであまり積み重ねられてこなかった。福島（2009）はその理由として、ポジティブな経験よりネガティブな経験の重要性が生存上大きいことや、共感の神経活動が実験的に観察されづらいという観察手法の問題を挙げている。しかし、近年では正の共感に関するレビュー論文（Morelli, Lieberman & Zaki, 2015）が出されるなど、正の共感への関心が少しずつ高まりつつあるといえる。Morelli et al. (2015) は正の共感を、他者のポジティブ情動を理解し代理的に共有することとし、これまで負の共感について合意されてきた認知的側面と情動的側面に対応して定義づけている。さらに、Morelli, Rameson, & Lieberman (2014) において、他者の精神状態の推測に関わる前頭前野内側部（MPFC）および背内側部（DMPFC）が他者の不安や幸福を見た時に共に賦活する一方で、ネガティブ情動に関わる前帯状皮質背側部（dACC）や島皮質前部（AI）は他者の痛みや不安を見た時に、ポジティブ情動に関わる前頭前皮質腹内側部（VMPFC）は他者の幸福を見た時に選択的に賦活することが示されている。Morelli et al. (2015) はこのことから正の共感とは、負の共感と同様に他者の精神状態について考えることは共通するが、共有される情動価が異なるという点で区別できる概念であるとするなど、類似する概念の中における正の共感の位置づけを整理している。

6. 正の共感に関する研究

前述のとおり、正の共感に関する研究はまだ多くはないが、この概念について比較的議論がなされているのは向社会的行動との関連である。Hoffman (1981) は人間の利他性に関する議論の中で、犠牲者が助けられた後に喜びを示した時に援助者が共感的喜び (empathic joy) を感じ、その経験が更なる向社会的行動の動機となる可能性を示している。また、Smith et al. (1989) や Batson et al. (1991) は、援助のフィードバックが予期できる時に援助行動が示されやすいことを部分的に明らかにし、人間は助けを必要とする人物の喜びや安心を代理的に共有することを予期するために援助的な行動を取ることを示唆している。さらに、Telle & Pfister (2016) は、向社会的に行動することは行動の受け手の幸福に貢献するだけでなく、行動の実行者にもポジティブな影響を引き起こす (Dulin & Hill, 2003; Dunn, Aknin, Norton, 2008) ことから、向社会的行動はこの快適な情動状態を維持するための手段であると考え、正の共感と向社会的行動が関連するメカニズムとして気分維持 (mood maintenance) を想定している。

また、特性的な正の共感と社会的な行動傾向の関連についても研究がされてきており、日本においては、櫻井ほか (2011) が葉山ほか (2008) の共感性プロセス尺度を修正し、向社会的行動や攻撃行動との関連を検討している。その結果、ポジティブな感情に対する好感・共有は向社会的行動傾向と正の相関を示したほか、外顕性および関係性攻撃傾向と負の相関を示した。このことから、ポジティブな情動への好感・共有が高い人は、自分が向社会的行動を行うことで相手を喜ばすことができれば、その喜びを共有して自分も喜ぶことができるとしている。

発達研究においては、幼児や児童などの子どもについても正の共感が見られることが示されている。Strayer (1980) は4歳児と5歳児を8週間観察し、他児への共感的な反応の生起を評定した結果、他児のポジティブな感情に対す

る情動的な共感の表出の割合は、他児の悲しみや怒り、痛みなどに対するものより多かったことを明らかにしている。また、実験事態においては、de Wied, Goudena, & Matthys (2005) が、破壊的行動障害 (disruptive behavior disorders; DBD) と診断された 8~12 歳児の男児と統制群の男児に対し、様々な情動を喚起するような映像を複数見せ、観察された反応を評定するといった Picture-Story 法による比較を行っている。その結果、DBD の男児は悲しみや怒りなどに対しては統制群と比較して共感的な反応が少ない一方で、他者の幸福に対しては統制群と同程度共感的に反応した。一方で、正の共感と向社会的行動との関連を示した研究として、Aknin, Hamlin, & Dunn (2012) が 2 歳前の子どもに対しておやつを与えたときの子どもの表情と、子どもがパペットにおやつを与える表情を観察し、後者の方がポジティブな情動表出が高いことを見出している。

また、Sallquist et al. (2009) は子どもの 3 歳時と 4 歳時において、保護者に対して質問紙調査を実施し、7 項目 1 因子構造の Dispositional Positive Empathy Scale (DPES) を作成した他、これを用いて測定した情動的な正の共感傾向について、子どものポジティブな情動や社会的コンピテンスと正の相関があることを明らかにしている。この研究ではさらに、負の共感に関する発達研究でよく行われているように、大人の演技に対する子どもの共感的な反応を測定するという試みもされている。具体的には、実験者と子どもが同室している状況で実験助手が入室し、実験者にプレゼントが届いていることを告げて包装された袋を手渡す。その後、実験者は大げさに驚いたふりをして、約 30 秒の間、笑顔でポジティブな言葉を発しながら喜ぶ演技をするというものである。この間における子どものポジティブな情動表出を 5 秒ごとに 4 段階で評定したが、DPES との正の相関は女兒にのみ弱く示されたにとどまるという結果になっている。

このような観察による子どもの正の共感の測定については、刺激の妥当性の問題が挙げられる。子どもの正の共感について、特に情動的な側面を正確に測定するためには、共感対象の感情への純粋な反応を測定する必要がある。しか

し、負の共感の測定とは異なり、正の共感の測定においては、共感対象者の感情以外のことに対する子どものポジティブ情動が混在しやすい。例えば **Sallquist et al. (2009)** は、観察場面において子どもがプレゼントを見て自分も何かもらえるのではないかと期待した結果のポジティブ情動が生じていた可能性があると考えしている。また、**Aknin et al. (2012)** ではパペットがおやつを食べる様子が子どもにとってそもそも快刺激であった可能性がある²⁾。**Strayer (1980)** のような日常場面の観察や **de Wied et al. (2005)** の **Picture-Story** 法も含め、正の共感の測定においては相手の情動以外の快刺激の反応だと思われるものを除外したり、できるだけシンプルな刺激を用いたりするなどの工夫が必要であると思われる。

7. 正の共感の情動的側面の発達過程について

負の共感の発達に関して、前述のとおり **Sagi & Hoffman (1976)** は、生後間もない新生児が他者の苦痛に対して自身も苦痛を示すことを明らかにし、その後の自他の区別や泣きのコントロールの発達に伴ってこのような自己中心的な情動反応は少なくなるとしている。乳幼児においてこのような情動的な共感が観察されるためには、当然のことながら子ども自身の情動表出の手段が備わっている必要があるが、人間の子どもは生まれつき「泣き」という苦痛の表出手段を持っているため、**Sagi & Hoffman (1976)** で観察されたような反応を示すことができたと言える。ところが、正の共感の情動反応として必要とされる「笑い (laughter)」または「微笑み (smile)」についてはこの限りではない。一般的に、生後すぐに観察される微笑みは自発的的微笑み (spontaneous smile) と言われるものであり、睡眠中に観察される (川上・高井・川上, 2012)。一方、覚醒中に対人的に示される社会的微笑み (social smile) は生後1ヵ月ごろから現れ始め、3ヵ月ごろにピークを迎える。その後、微笑みを示す対象は養育者と見知らぬ人物に分化し、人見知りの出現に伴って子どもは養育者や親しい人物に対して選択的に微笑むようになる (高橋, 1995)。Le-

wis (2008) はこのような社会的微笑みという現象の出現から、生後3ヵ月までの間にそれまで持っていた充足 (content) の感覚が一次的情動である喜び (joy) に代わっていくと考えている。また高橋 (1995) は、2歳までの縦断的な観察において、母親との遊びの中で3ヵ月から8ヵ月までに微笑みが増加し、その後はあまり変わらないことを示している。一方で、母親との遊びにおける声を伴った対人的な笑いは、2歳まで徐々に増加することが示されている (Nwakah, Hsu, Dobrowolska, & Fogel, 1994) ことから、親和的な人物に対するポジティブ情動自体は発達とともに大きくなっていくと推察できる。

このように、対人的な状況で示されるポジティブ情動は、親和性という制限を受けながらも、生後1ヵ月以降から増加していく。このことから、運動知覚的な新生児模倣などの現象を除いて、少なくとも観察可能な正の共感が見られるのは、この社会的微笑みの獲得と同時期かそれ以降であると考えられ、負の共感とは異なる発達の様相を見せると予測できる。そして、もし正の共感が負の共感と同じような自動的な情動伝染という性質を持ち、新生児期において正の情動伝染の出現が単に表出手段の未獲得に制限されているのであれば、社会的微笑みと同様に生後1ヵ月頃から徐々に正の情動的共感が観察されるようになると考えられる。反対に、もし正の共感がそれよりも遅れて示されるのであれば、少なくとも観察可能な形での自動的な正の情動伝染は存在しないか、発達または学習により獲得されていくものであると断言することができる。

また、前述のように自動的な負の情動伝染による泣きに関しては、泣きのコントロールや自我意識の発達とともに、生後から徐々に減少していくが、高橋 (1995) や Nwakah, Hsu, Dobrowolska, & Fogel (1994) から、微笑みや笑いという反応は少なくとも発達とともに減少することはあまりなさそうである。そして、単に正の共感発達がこのような微笑みや笑いの発達に影響されるのであれば、複数のポジティブ共感喚起状況で同じような発達の傾向が認められると考えられる。一方、発達の傾向が状況によって異なるのであれば、子どもは単に相手の情動のみに共感しているわけではなく、相手のポジティブ感情が生起する状況を伴って初めて共感すると言うことができ、正の共感の情動的

側面の発達のカギとして何らかの認知的要因が存在すると考えられる。

これらのことから、正の共感の情動的側面が出現する時期やその発達の変化について探索的な検討を行った上で、その発達メカニズムに関わる要因について探っていく必要があるといえる。ただし、当然のことながら表出される情動反応が必ずしも内的な情動を反映しているわけではないという可能性もあるため、微笑みが示されなくても正の共感が生じていたり、示された微笑みが必ずしも正の共感を反映していなかったりすることも考えられる。そこで、将来的に生理的・神経学的な指標を用いた情動反応の発達の変化の議論が加わることを視野に入れた上で、まずは観察される正の共感に関して検討を進めていくことが求められる。

8. 正の共感を含めた共感理論およびモデル構築の可能性について

前述のとおり、Hoffman (1987)、Davis (1994/1999)、de Waal (2008) などでは負の共感を中心に議論がなされているが、共感が他者の感情に対する反応である限り、情動全体を俯瞰した理論やモデルが必要であると考えられる。そのため、今後は正の共感に関して研究を積み重ね、これまでの理論やモデルが適用できるかどうかを実証的に検討していく必要がある。

Davis (1994/1999) のモデルで示された研究の枠組みは、正の共感の研究でも応用可能であると考えられる。例えば、このモデルにおける過程としての視点取得から情動的な反応への影響や、相手の内的状態の評価の正確さから行動的な反応への影響は、正の共感に関してはほとんど解明されていないため、今後負の共感と同様に検討していく価値があると言える。また、負の共感における情動的な反応としては、(共感的怒りなどの相手の情動と方向が異なるものを除いて) 自己指向的な個人的苦痛と他者指向的な共感的配慮に分かれているが、正の共感における情動的反応はこのどちらに近いものであるのかは明らかではない。もし上記のように発達に伴いこの反応が増加していくのであれば、社会性の発達も考慮すると他者指向的な性質を持つ可能性が生じてくる。

このように、このモデルにおける枠組みの中で、負の共感で明らかになっていることは正の共感では言えるのかななどを検証していき、情動の種類を通じて共通する、または異なるメカニズムを明らかにしていくことが求められる。

また、本論文においては、人間の発達という個体発生的な正の情動的共感の表出について、負の共感とはその機序や性質が異なる可能性があるとして指摘したが、一方で Hoffman (1987) や de Waal (2008) が想定するような自我意識の発達がより高次な共感とつながるというメカニズムは、正の共感においても想定できる可能性が高い。少なくとも認知的な視点取得能力や行動的側面については、自分の共感的情動が他者に起因するものであることを認知できる必要があるため、正の共感においても自我意識が貢献すると考えられる。特に、ネガティブな状況における他者について、困難が解決した後の他者のポジティブ情動に予期的な共感を抱いてより向社会的に行動するためには、相手の立場に立ち、相手が喜ぶことを正確に予期できる必要がある。そのため、負の共感と同様、自己とは独立した内的状態を持つ者として他者を捉える能力が明らかに必要であると思われる。このことは、Morelli, Rameson, & Lieberman (2014) において、正の共感と情動価の違いという点で負の共感と機序が異なるものの、他者の精神状態の推測といった認知的な反応については共通する基盤を持つといった結果からも推察が可能である。また、現時点でポジティブな状況にある他者に対して情動的に共感した結果生じる行動としては、他者への称賛や祝福の表出などが考えられるが、これらについても検討していく意義があると思われる。いずれにせよ、今後は負の共感で行われたように、個体発生学・系統発生学両方において正の共感についても研究が進められることによって、これらの理論やモデルを拡張していくことが課題である。

1) 感情と情動という語の扱いについて廣中 (2015) は、情動は感情の下位概念であり、①誘発する刺激が特定可能な反応、②始まりと終わりが明確な強い反応、③身体的反応を伴う反応であるとしている。本論文ではこの定義に従い、感情の中でも他者の感情という誘発刺激が明確である共感的なものについ

て情動という語を用いている。

2) Aknin et al. (2012) では、子どもにおやつを与えた上で実験者が「たまたま見つけた」他のおやつをパペットに与えさせる時より、子ども自身のおやつをパペットに与えさせる時の方が観察される子どものポジティブ情動が大きいことを示しており、このような情動が単に人形のお菓子を食べる様子による快だけを反映しているわけではないことは明らかである。しかし、そもそもこの実験は正確には、他者に施しを与える際の正の情動である warm-glow の存在を検討したものである。純粋な正の共感を測定するためには、他者の情動以外に快刺激となり得るものを除いた上で、他者がおやつを食べるのを見る時と、それを見ていない時または自分がおやつを食べている時で、子どものポジティブ情動の比較を行う必要がある。

引用文献

- Aknin, L. B., Hamlin, J. K., & Dunn, E. W. (2012). Giving leads to happiness in young children. *PLoS ONE*, **7**, e39211.
- Batson, C. D., Batson, J. G., Slingsby, J. K., Harrell, K. L., Peekna, H. M., & Todd, R. M. (1991). Empathic joy and the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 413-426.
- Bischof-Köhler, D. (1991). The Development of Empathy in Infants. In M. E. Lamb, & H. Keller (Eds.), *Infant development: perspectives from German-speaking countries* (pp.245-273). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Davis, M. H. (1999). 共感の社会心理学：人間関係の基礎 (菊池章夫, 訳). 東京：川島書店. (Davis, M. H. (1994). *Empathy. A social psychological approach*. Boulder, CO: Westview Press.)
- de Waal, F. B. M. (2008). Putting the altruism back into altruism: the evolution of empathy. *Annual Review of Psychology*, **59**, 279-300.
- de Weid, M., Goudena, P. P., & Matthys, W. (2005). Empathy in boys with disruptive behavior disorders. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **46**, 867-880.
- Dulin, P. L., & Hill, R. D. (2003). Relationships between altruistic activity and

- positive and negative affect among low-income older adult service providers. *Aging & Mental Health*, **7**, 294-299.
- Dunn, E. W., Aknin, L. B., & Norton, M. I. (2008). Spending money on others promotes happiness. *Science*, **319**, 1687-1688.
- Feshbach, N. D. (1978). Studies of empathic behavior in children. In B. A. Maher, & W. B. Maher. (Eds.), *Progress in experimental personality research, vol. 8* (pp.1-47). Waltham, MA: Academic Press.
- 福島宏器 (2009). ポジティブ経験に対する共感. 開一夫・長谷川寿一 (編), ソーシャルブレイン: 自己と他者を認知する脳 (pp.214-215). 東京: 東京大学出版会.
- 長谷川寿一 (2015). 共感性研究の意義と課題. 心理学評論, **58**, 411-420.
- Hastings, P. D., Zahn-Waxler, C., Robinson, J., Usher, B., & Bridges, D. (2000). The development of concern for others in children with behavior problems. *Developmental Psychology*, **36**, 531-546.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性プロセス尺度作成の試み. 筑波大学心理学研究, **36**, 47-56.
- 廣中直行 (2015). 快楽と恐怖の起源. 渡辺 茂・菊水健史 (編). 情動学シリーズ1 情動の進化: 動物から人間へ. (pp.100-135). 東京: 朝倉書店.
- Hoffman, M. L. (1981). Is altruism a part of human nature? *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 121-137.
- Hoffman, M. L. (1984). Interaction of affect and cognition in empathy. In C. E. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc (Eds.). *Emotions, cognition, and behavior* (pp.103-131). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (1987). The contribution of empathy to justice and moral judgment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development* (pp.47-80). New York, NY: Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (2001). 共感と道徳性の発達心理学: 思いやりと正義とのかかわりで (菊池章夫, 二宮克美, 訳). 東京: 川島書店. (Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. New York, NY: Cambridge University Press.)
- 川上清文・高井清子・川上文人 (2012). ヒトはなぜほほえむのか: 進化と発達にさぐる微笑の起源. 東京: 新曜社.
- Kiang, L., Moreno, A. J., & Robinson, J. L. (2004). Maternal preconceptions about parenting predict child temperament, maternal sensitivity, and children's empathy. *Developmental Psychology*, **40**, 1081-1092.
- Knafo, A., Zahn-Waxler, C., van Hulle, C., Robinson, J. L., & Rhee, S. H. (2008).

- The developmental origins of a disposition toward empathy : Genetic and environmental contributions. *Emotion*, **8**, 737-752.
- Lipps, T. (1926). *Psychological studies*. Baltimore, MD : Wiliams & Wilkins.
- 松沢正子 (1996). 1~2 歳児における自他意識の発達と共感行動. 性格心理学研究, **4**, 47-60.
- Morelli, S. A., Lieberman, M. D., & Zaki, J. (2015). The emerging study of positive empathy. *Social and Personality Psychology Compass*, **9**, 57-68.
- Morelli, S. A., Rameson, L. T., & Lieberman, M. D. (2014). The neural components of empathy : Predicting daily prosocial behavior. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **9**, 39-47.
- Moreno, A. J., Klute, M. M., & Robinson, J. L. (2008). Relational and individual resources as predictors of empathy in early childhood. *Social Development*, **17**, 613-637.
- Nwokah, E. E., Hsu, H., Dobrowolska, O., & Fogel, A. (1994). The development of laughter in mother-infant communication : Timing parameters and temporal sequences. *Infant Behavior and Development*, **17**, 23-35.
- Rhee, S. H., Friedman, N. P., Boeldt, D. L., Corley, R. P., Hewitt, J. K., Knafo, A., Lahey, B. B., Robinson, J., van Hulle, C. A., Waldman, I. D., Young, S. E., & Zahn-Waxler, C. (2013). Early concern and disregard for others as predictors of antisocial behavior. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **54**, 157-166.
- Roth-Hanania, R., Davidov, M., & Zahn-Waxler, C. (2011). Empathy development from 8 to 16 months : Early signs of concern for others. *Infant Behavior and Development*, **34**, 447-458.
- Sagi, A., & Hoffman, M. L. (1976). Empathic distress in the newborn. *Developmental Psychology*, **12**, 175-176.
- 櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係. 心理学研究, **82**, 123-131.
- Sallquist, J., Eisenberg, N., Spinrad, T. L., Eggum, N. D., & Gaertner, B. M. (2009). Assessment of preschoolers' positive empathy : Concurrent and longitudinal relations with positive emotion, social competence, and sympathy. *The Journal of Positive Psychology*, **4**, 223-233.
- Smith, A. (2009). *The Theory of Moral Sentiments* (250th-anniversary edition). London : Penguin Books (Original work published in 1759).
- Smith, K. D., Keating, J. P., & Stotland, E. (1989). Altruism reconsidered : The

- effect of denying feedback on a victim's status to empathic witnesses. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 641.
- Strayer, J. (1980). A naturalistic study of empathic behaviors and their relation to affective states and perspective-taking skills in preschool children. *Child Development*, **51**, 815-822.
- 高橋道子 (1995). 微笑の発生と出生後の発達. 東京: 風間書房.
- Telle, N., & Pfister, H. (2016). Positive empathy and prosocial behavior: A neglected link. *Emotion Review*, **8**, 154-163.
- Titchner, E. B. (1909). *Lectures on the Experimental Psychology of Thought-Processes*. New York, NY: Macmillan.
- van Hulle, C., Zahn-Waxler, C., Robinson, J. L., Rhee, S. H., Hastings, P. D., & Knafo, A. (2013). Autonomic correlates of children's concern and disregard for others. *Social Neuroscience*, **8**, 275-290.
- 渡辺 茂 (2015). 共感の進化. 渡辺 茂・菊水健史 (編). 情動学シリーズ 1 情動の進化: 動物から人間へ. (pp.100-135). 東京: 朝倉書店.
- Watanabe, S. (2011). Drug-social interactions in the reinforcing property of methamphetamine in mice. *Behavioral Pharmacology*, **22**, 203-206.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982). The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg (Ed.). *The development of prosocial behavior* (pp.109-137). San Diego, CA: Academic Press.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M. (1990). The origins of empathic concern. *Motivation and Emotion*, **14**, 107-130.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. (1992). Development of concern for others. *Developmental Psychology*, **28**, 126-136.
- Zahn-Waxler, C., Robinson, J. L., & Emde, R. N. (1992). The development of empathy in twins. *Developmental Psychology*, **28**, 1038-1047.

— 植田瑞穂 大学院文学研究科研究員 —

— 桂田恵美子 文学部教授 —